

展示会開催風景

展示会は、講演会場のほか、美術館内の運河ギャラリーにて開催し、25mにおよぶパネル展示スペース2面を中心に、各テーマに沿って約70枚のパネルおよびポスターを展示しました。

運河ギャラリーは、美術館来訪者が立ち寄りやすい会場であったことから、2日間で200名以上の見学者があり、愛知大学およびルーツ校の東亜同文書院大学をアピールできました。

さらに今回、初の試みである東亜同文書院大学と愛知大学の長崎とのつながりを中心に紹介した先行パネル展「東亜同文書院大学と長崎、そして愛知大学へ」(9/22～10/6)を開催し、長崎の方々に東亜同文書院大学と本学を身近に感じていただけたと思います。ここでは展示会の様子と、東亜同文書院大学と愛知大学の長崎とのつながりを紹介した9枚の展示パネルを掲載します。



運河ギャラリー展示風景①



運河ギャラリー展示風景②



運河ギャラリー展示風景③



運河ギャラリー展示風景④



先行パネル展にあわせ、幅約12mもの横断幕による事前告知も実施(運河ギャラリー)



講演会場での展示風景



長崎との縁が深い写真家・東松照明氏(愛知大学卒業生)の作品も展示



武井義和氏(センター研究員)によるギャラリートーク

東亜同文書院大学とは

①沿革

東亜同文書院大学は、1900(明治33)年5月、貴族院議長であった近衛篤磨が会長を務める東亜同文会により、教育文化事業によって日中間の友好提携を実現するという理念のもとで設置された学校「南京同文書院」に始まる。設置にあたっては清国高官の理解と支援を得たものの、当時発生していた義和団事件により、1901年上海へ移転し日清間の貿易をすすめることで両国の経済力を強化しようとするビジネススクール「東亜同文書院」として再出発。1939年にはその実情と中国の総合研究が評価され、商科系単科大学「東亜同文書院大学」に昇格した。1945(昭和20)年の日本敗戦により閉校となった。

南京同文書院とその後身の東亜同文書院は、日本最初の海外高等教育機関であった。

②特徴

日清(日中)間の貿易実務者を育てる目的で、語学教育に力を入れ、中国語と英語を徹底して学ばせた。また、貿易取引の商取引の仕組や商品などを調査するため、1907年から1943年まで夏季休暇の2~3ヵ月間、最終学年生は中国各地への「調査大旅行」に赴いた。コースは700(東南アジアを含む)にも達した。学生たちは「調査大旅行」を通じて中国の現実を知り、そして中国人への親愛の情を抱いた。

また、学生たちが書き残した「調査報告書」や、調査をもとに東亜同文会が1917(大正6)年から3年間かけて刊行した世界初の『支那省別全誌』全18巻は、戦前の中国各地の状況を詳細に知ることができる貴重な資料である。



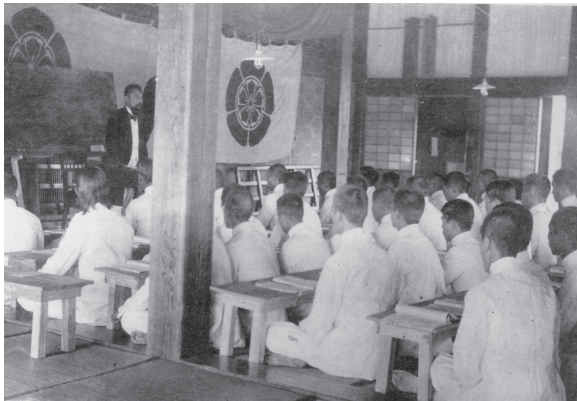
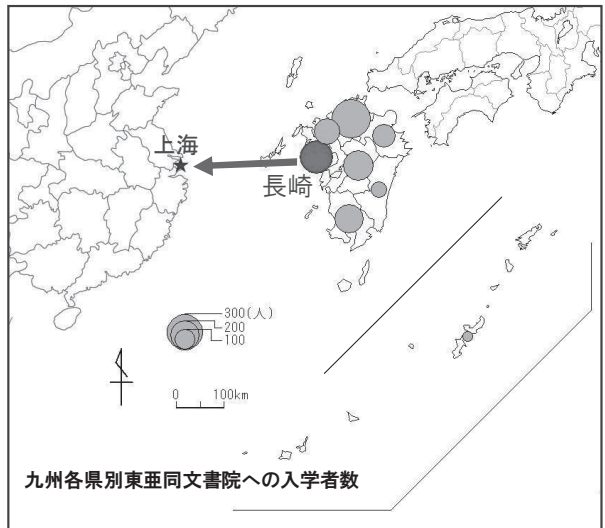
ホンチアオ
東亜同文書院虹橋路校舎(1917~1937年)

長崎と東亜同文書院

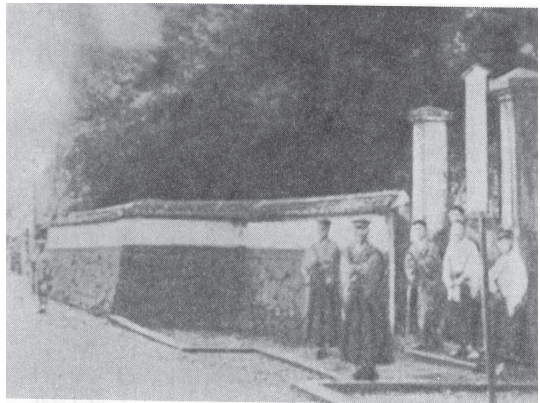
東亜同文書院(大学)の新入生が日本から上海へ向かう際の出発地は、ほかならぬ長崎であった。大陸への玄関先である長崎(県・市)と東亜同文書院との縁は深いものがある。

1901年の東亜同文書院誕生から1945年日本敗戦による閉校まで、東亜同文書院(大学)には約5,000名の学生が学んだが、九州では福岡県出身者が345名と最も多く、第2位が長崎県出身者で258名であった。以下、熊本県207名、鹿児島県199名と続く。

いっぽう、長崎は書院生にとって、東亜同文書院が度重なる戦禍に見舞われた際の避難場所ともなった。まず、1913(大正2)年に中国で勃発した「第二革命」では校舎が被弾・炎上したため、同年8月から10月まで、現在の大村市にある正法寺と本経寺を借用して仮校舎とした。



大村仮校舎での授業風景



大村仮校舎・正法寺

その後、1917年に新校舎「虹橋路校舎」が現地上海に落成したが、1932(昭和7)年に勃発した第一次上海事変では長崎に一時引揚げた。さらに日中全面戦争勃発直後の1937年10月に長崎の女子師範学校(現在の桜馬場中学校)を仮校舎として授業を継続することになった。翌11月に虹橋路校舎が第二次上海事変の戦火に遭って焼失したため、1938年4月に上海へ復帰するまでの6ヵ月間、仮校舎は東亜同文書院にとって重要な存在だった。

長崎旧女子師範校舎での仮校舎時代 (現在の桜馬場中学校)

1937(昭和12)年7月、北京郊外で日中戦争が勃発し、8月には戦火が上海にも及んだ。当時、大内暢三院長(福岡県出身)は上海での継続を目指していたが、中国駐在日本公使や上海総領事の意見を受け入れて日本国内での仮校舎設置に同意し、9月に長崎での開校を決定した。

10月18日、東亜同文会津田静枝常務理事臨席のもと、長崎旧女子師範校舎(現在の桜馬場中学校)を使用する形で仮校舎の開院式が挙行された。近衛文麿東亜同文会会長、外務大臣らにより祝辞が述べられたほか、長崎の官民名士約150名が出席した。翌1938年4月に上海(疎開して空き家になっていた交通大学施設)に改めて臨時校舎が置かれるまで、東亜同文書院は長崎に存在していた。



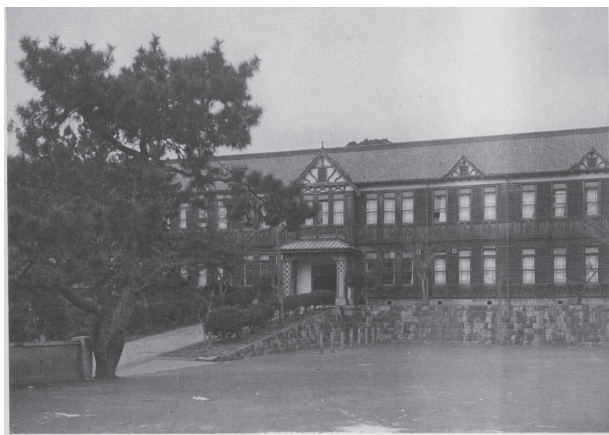
東亜同文書院仮校舎時代



その場所にある現在の桜馬場中学校

長崎仮校舎（旧長崎女子師範校舎） の風景

【仮校舎の外観】

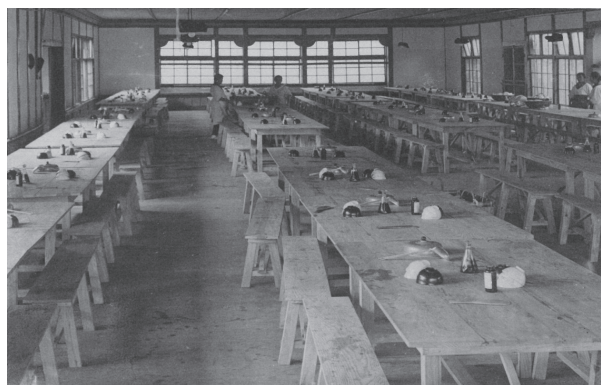
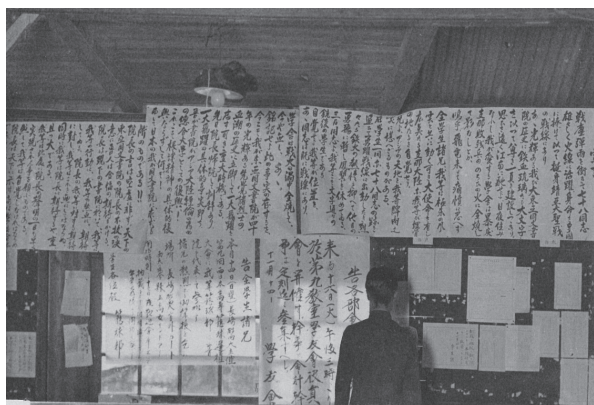


学舎



学生寮

【寮生活の様子】



(左上) 掲示板、(右上) 部屋、
(下) 食堂

書院生と長崎の街、そして市民

長崎での仮校舎でも全寮制度が堅持された。仮校舎では虹橋路校舎のように楼上寝室、階下自習室という恵まれた環境とはいえ、座机の置かれた畳敷の自習室兼寝室に1室 10 人前後が押し込まれた。

当初、長崎の人々は上海で学んでいた学生への好奇心と、戦火に追われた身の上である同情心をおりませた感情で歓迎した。いっぽう、上海復帰の見通しもつかずに仮校舎生活を送る学生は、休校中の食費・週給等が一時に精算されたため、懐具合はきわめて暖かく、土曜日・日曜日ともなれば、街へ流れる学生が多かった。



書院生が繰り出した
当時の浜野町

また、10 月末から 11 月にかけて一部の4年生の通訳出陣の送別会も盛んに行われ、集団で東浜町や思案橋界隈に繰り出すことが多くなった。国際都市上海とは違った開放感のある長崎の街へ出ると、うっぶんを晴らすかのように街頭ストームに発展した。

しかし、乱暴に明け暮れていたわけではなく、同じ構内にあった幼稚園の園児たちには「良いお兄ちゃん」であったし、街では「図書館と本屋を最も多く利用するのも書院の学生」との噂が広まった。また、中国や東南アジアへの大調査旅行に関して市民への報告会を行い、市民との交流を深めた。



長崎市公会堂で行われた
大旅行公開演説

長崎との別れ

東亜同文書院は 1938(昭和 13)年 4 月に上海の交通大学を臨時校舎として使用することとなり、4 月 8 日・12 日・14 日の 3 回にわたり教職員とその家族、学生たちは長崎を出発した。そして 4 月 17 日上海で開院式が挙行された。

上海への出発時、彼らは盛大な見送りを受けたが、その時の書院生は次のように回想している。

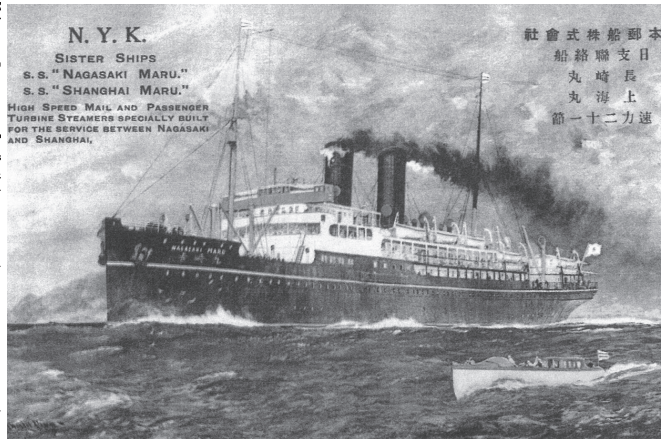
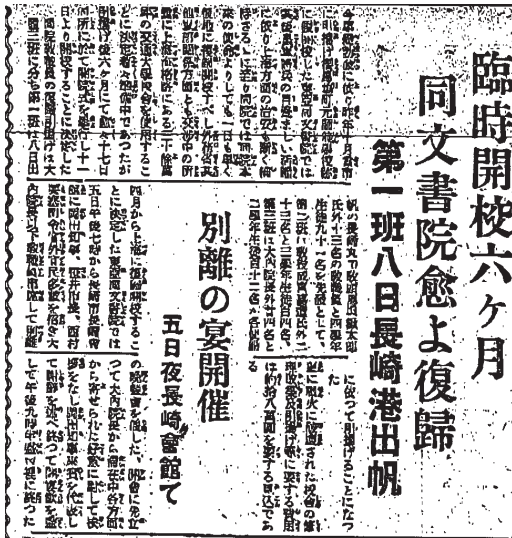
(前略)波止場には、医大・薬大・高商から中学校・女学校・小学校まで、それぞれ代表が整列していた。仮校舎と同じ構内にあった幼稚園の園児も多数並んでいた。市の関係者らしい幾つかの団体や一般市民も見うけられた。

出向合図のドラの音とともに「愛国行進曲」のメロディーが船内に流れた。時局がら「螢の光」は「愛国行進曲」に変えられていたのだ。突然、波止場から「東亜同文書院万歳！」の声があがった。船上からは「長江の水……」と寮歌を高らかに歌ってこれに応えた。その声は潮風によって長崎の街々へと渡っていった。

書院の学生を野蛮視(?)した仮校舎真向いの瓊浦女学校の生徒も校旗を汐風になびかせて多数見送りに来ていたのには驚かされた。

(『東亜同文書院大学史 創立 80 周年記念誌』滬友会、1982 年より)

なお、当時の『長崎新聞』は以下のように報道している。



上海へ復帰する書院生たちを乗せた長崎丸
(書院 45 期生 岩永鋭吉氏 長崎在住、提供)

『長崎新聞』1938 (昭和 13) 年 4 月 7 日

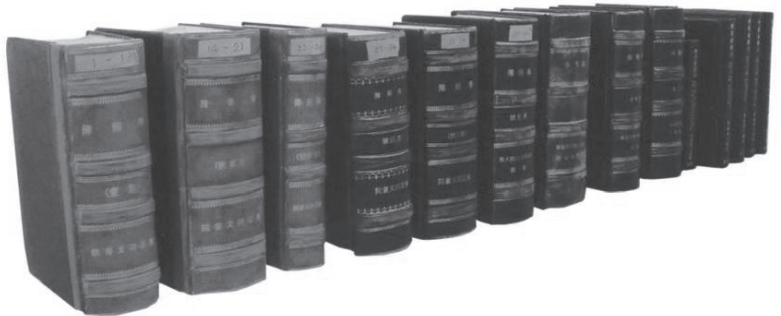
東亜同文書院の閉校と 愛知大学の誕生

上海復帰後の東亜同文書院は、1939(昭和 14)年に大学へ昇格するなど、アカデミックさを増したが、大戦末期には学生の学徒出陣、勤労働員などを余儀なくされた。そして1945年8月、日本の敗戦により、東亜同文書院大学は廃校となり、学生・教職員たちは日本に引揚げざるを得なかった。

こうした状況下、東亜同文書院(大学)は痕跡も残すことなく消滅するかにみえた。しかし戦後、愛知県豊橋市に誕生した「愛知大学」がその流れを受け継いでいくことになる。それを実現したのは、最後の院長となった本間喜一であった。

本間は 1891(明治 24)年に山形県で生まれ、東京帝国大学を卒業、判事を務めた後に学問の世界に転じた。東京商科大学教授などを経て 1940 年東亜同文書院大学に赴任。そして大戦末期に学長に就任したが、1946 年 3 月に日本へ引揚げた後、旧同文書院教職員たちの尽力も得て、国内で大学再建を目指し奔走を始める。その候補地として、東亜同文書院卒業生がいた大分県別府市も挙がっていたが、愛知県豊橋市にあった旧陸軍の学校跡を利用する形で、1946 年 11 月に愛知大学を設立したのである。なお、「東亜同文書院大学」としなかった理由は、戦時中大陸にあったということで GHQ の監視が厳しかったことによる。

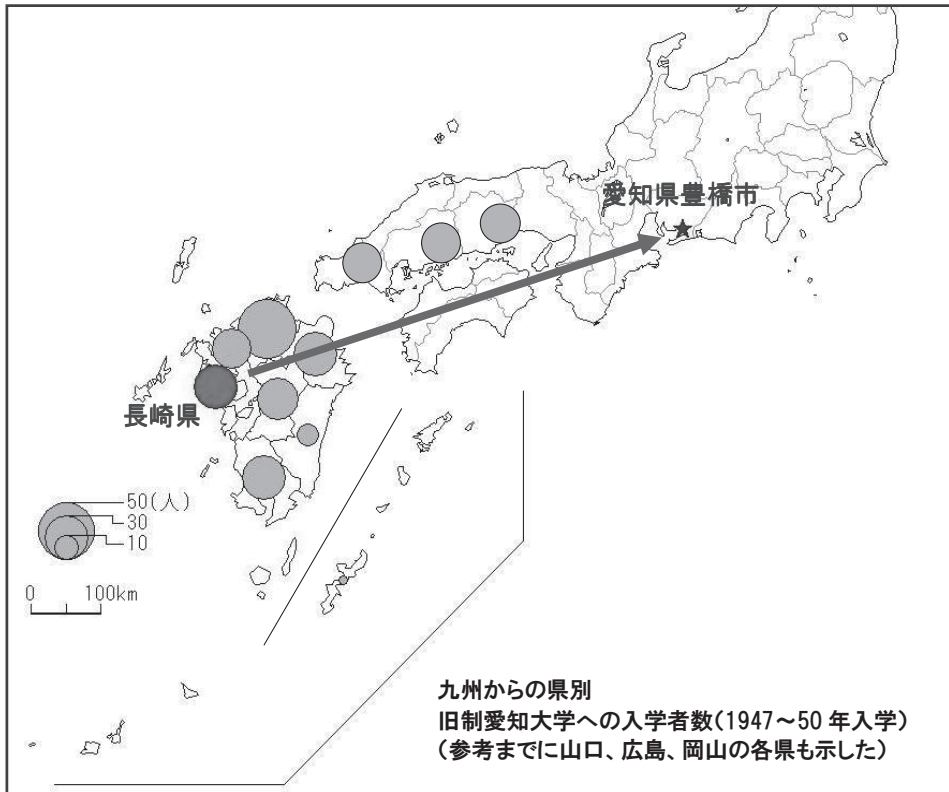
創生期の愛知大学は朝鮮半島や台湾にあった京城帝国大学や台北帝国大学など、海外にあった日本の高等教育機関からの学生や教員も受け入れた。だが、その中でも東亜同文書院(大学)がその主流を占めたことは、書院で学んだ全ての学生の学籍簿と成績簿が愛知大学に保管されていることから分かる。これは本間が引揚げる際に学生と教職員に指示して持ち帰らせたものであり、戦後まもなく愛知大学に受け継がれ、現在はこの 2 つの大学のつながりを歴史的に示す貴重な資料として存在している。



本間喜一と東亜同文書院(大学)の学籍簿・成績簿

九州・山陽地方出身者の多い 愛知大学入学生

1946(昭和21)年11月愛知県豊橋市(旧陸軍予備士官学校施設)に設立された愛知大学には、敗戦後海外引き揚げ学生の受入れを目的の1つとして設立した。上海の東亜同文書院大学を中心とした海外で学んだ学生や、県外出身者も多く入学した。なかでも大陸に近い、九州や山陽地方の出身者が際立っていた。



<1947~1950年 県別出身者数>

◇九州地方

長崎	福岡	佐賀	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
30人	54人	24人	29人	30人	7人	30人	1人

◇山陽地方

岡山	広島	山口
31人	29人	34人

愛知大学卒業生・東松照明氏と長崎

愛知大学の卒業生は今日までに 13 万人以上を数える。実業の世界で活躍する者、市町村役場や首長として活躍する者など多岐にわたるが、ここではその中から、有名な写真家で長崎県とも縁が深かった東松照明氏を紹介する。

東松氏は 1930(昭和 5)年に名古屋市で誕生、1950 年愛知大学に入学し写真部に所属した。翌年大学の写真展に「皮肉な誕生」などを発表し、注目を浴びることになった。



「皮肉な誕生」をモチーフにして、近年愛知大学が制作した広告

長崎では県美術館などで数度東松氏展示会が開かれ、同氏の逝去直後にも同館で追悼展が催された

卒業後、岩波写真文庫制作スタッフを経てフリーになり、1958年に第1回日本写真批評家協会賞新人賞を受賞。1972年には沖縄に移住して、その島々に東南アジアを加えた写真集『太陽の鉛筆』で、1976年に毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞を受賞した。

東松氏は米軍基地の撮影から始まる「占領／アメリカニゼーション」を通じて、戦後の日本社会を独自の視座から捉えるという活動を展開し、その一環として長崎の被爆の跡を撮影するようになった。もともとは原爆の惨状を世界に知らしめるための写真集を企画した原水爆禁止日本協会の依頼によるものだったが、被爆者や原爆資料館の収蔵品などを撮影するようになると、毎年のように長崎を訪れるようになった。原爆と向かい合った仕事は『11時02分 NAGASAKI』をはじめとする写真集に結実していった。

さらに 1998年には長崎に一時移住して写真家としての活動を精力的にこなしつつあったが、沖縄に戻ったのち 2012年 12月 14日にこの世を去った。